

➤ **ビクターザウィナー (VICTOR THE WINNER、漢字表記：維港智能) = 香港**

せん6歳・鹿毛 (オーストラリア産・2018年9月5日生まれ)

父：Toronado = 母：Noetic (母の父：Cape Cross)

馬主 : ユンラウ・チュウ氏

調教師 : チャップシン・シャム

騎手 : カーチュン・リョン

戦績 : 全14戦7勝、2着2回

総獲得賞金 : 約3億5,740万円

主な戦績 : '24 センテナリースプリントカップ (G1) 1着

'23 ジョッキークラブスプリント (G2) 2着

'23 シャティンヴァーズ (G3) 2着

ビクターザウィナーはオーストラリアのアダム・サングスター氏の生産馬で、2020年のメルボルン・プレミア・イヤリング・セールに上場され、香港の代理購買組織ゴールドン・リバー・インベストメント社が18万豪ドル(当時約1,370万円)で購入し、ユンラウ・チュウ氏の所有馬となりました。

父のトロナード(その父ハイシャパラル)は2013年のサセックスステークス、14年のクイーンアンステークスとマイルG1を2勝。主な産駒に2021年に豪G1のウィリアムレイドステークスを制したマスクトルセーダー、21年ユナイテッドネーションズステークス、22年マンハッタンステークスとアメリカでG1を2勝したトリブヴァン、今年の香港クラシックマイル、香港クラシックカップ優勝馬ヘリオスエクスプレスなどがあります。母のノーティック(その父ケーブクロス)は現役時1勝。近親にアメリカのカーターハンデキャップなどG1・3勝で、1990年と91年にエクリプス賞のチャンピオン・スプリンターに輝いたハウスバスター、2004年のG1ブリーダーズカップハンデキャップで2着のクエロクエロのほか、1996年から2000年にかけてJRAで5勝を挙げたヤシマジャパンがいます。

チャップシン・シャム調教師の管理馬として2022年9月にクラス4のハンデ戦(シャティン、芝1,200m)でデビューを迎え、M. プーン騎手とのコンビで幸先よく逃げ切り勝ち。直線では徐々に後続を引き離し、最後は3馬身1/4差をつけて人気に応えました。以降も前走まで全てシャティン競馬場の芝のレースを使われています。クラスの上だった2戦目(芝1,200m)は先手を奪ったものの最後の100mで脚色が一杯になって5着。J. マクドナルド騎手に鞍上が替わった11月のクラス3ハンデ(芝1,200m)は最後は半馬身差まで詰め寄せられたものの逃げ切って2勝目を挙げましたが、続く同条件の12月のレースは3番手からゴール前で後続に飲み込まれて7着でした。

年が明けて2023年1月のクラス3ハンデ(芝1,200m)を、H. ボウマン騎手の手綱の下、終始主導権を握って4馬身差で完勝すると、続く3月のクラス2ハンデ(芝1,200m)はZ. パートン騎手にスイッチとなりましたが、先行争いから最後まで脚色が鈍らず2馬身半差の快勝。次いで4月のクラス2ハンデ(芝1,200m)もダッシュをつけてハナに立つと、後続の追撃を半馬身振り切って連勝を3に伸ばし、満を持して重賞に駒を進めます。6月のシャティンヴァーズ(G3、芝1,200m)はK. ティータン騎手と初めてコンビを組んで2番人気。ゲートを出て前年の香港スプリント2着馬サイトサクセスとともに馬群を引っ張ると、その背後にいた断然人気で、3つのG1を含む5連勝中だったラッキースワイネスには残り100mでかわされましたが、後続には3/4馬身差をつけて2着を確保。上々の内容でデビューシーズンを締めくくりました。

休養を挟み9月のクラス1ハンデ戦(芝1,200m)ではラッキースワイネスとの再戦となりましたが、9キロのハンデ差を利用して同馬の追い込みを2馬身半差抑え、新シーズンの初戦を逃げ切りで飾りました。続く10月のプレミアボウル(G2、芝1,200m)はラッキースワイネスを2番手に従えて逃げますが、直線半ばで手応えが悪くなりしんがりの5着で入線。しかし、翌月のジョッキークラブスプリント(G2、芝1,200m)はゴール手前でラッキースワイネスにかわされたものの、最後まで粘りを見せクビ差2着に健闘。3着でG1・4勝馬のウェリントンには3/4馬身先着しました。そ

れが評価されてか、初の G1 の舞台となった香港スプリント(G1、芝 1,200m)は 3 番人気に推されます。ここは 8 戦ぶりに J. マクドナルド騎手を鞍上に迎え、日本のジャスパークローネにハナを譲って 2 番手を追走。これを残り 300m でかわして先頭に立ち見せ場を作りましたが、最後の 100m でラッキースワイネスら 3 頭にかわされ、2 馬身差の 4 着でした。

2024 年に入り、1 月 7 日にはボヒニアスプリントトロフィー(G3、芝 1,000m)で初めて直線のレースに挑み、トップハンデの 61 キロを背負いながらも 1 番人気でレースを迎えました。H. ボウマン騎手を鞍上にいつも通り先頭でレースを進めましたが、初の直線競馬のテンポに戸惑ったのか、残り 300m で後退を始めて最後は 7 着で入線。3 週後のセンテナリースプリントカップ(G1、芝 1,200m)では 13 頭立ての 7 番人気と評価を落としましたが、テン乗りとなった K. リオン騎手の下、レース前半を 35 秒 99 というペースで通過。直線に入っても余力十分で、まんまと逃げ切り、初の重賞タイトルが G1 となりました。レース後、シャム調教師は勝因として序盤のペースを挙げ、リオン騎手の騎乗を称賛するとともに、ビクターザウィナーに日本行きのプランがあることを明かしました。

ビクターザウィナーはここまで 14 戦 7 勝、2 着 2 回で、重～不良馬場での出走はありません。直線での一戦を除いて実戦では右回りの経験しかなく、来たる高松宮記念が初の左回りとなりますが、シャム師は調教で見せる同馬の左回りへの適性を日本遠征を決断した理由の一つに挙げています。全 14 戦中 13 戦は芝の 1,200m で、持ち時計は 2022 年 11 月の 1 分 8 秒 1。香港ジョッキークラブによるレーティングではゴールデンシックスティ(133)、ラッキースワイネス・ロマンチックウォリアー(132)、カリフォルニアスパングル(126)、ヴォイッジバブル(125)に次ぐ 124 の評価となっています。

● 馬主：ユンラウ・チュウ氏 (Chu Yun Lau / 漢字表記：朱潤流)

香港において自身の名義でこれまで3頭を所有し、いずれの馬にも漢字表記でビクトリア・ハーバーを表わす“維港”を冠名に用いており、本馬の馬名「ビクター(VICTOR)」もそれに由来しています。現役馬は本馬のみですが、引退した2頭のうちザランナー(維港奔流)はD. ホワイト、F. ロー、K. テインの各厩舎を渡り歩き2019/20年からの4シーズンで6勝。馬名登録はまだですが、ホワイト厩舎でデビューを控えるアイルランド産の4歳せん馬も所有しています。また、香港以外でも、マカオで競走馬を保有し、今年の2月時点で計7勝を挙げています。

● 調教師：チャップシン・シャム (Chap Shing Shum / 漢字表記：沈集成)

1960年6月27日生まれの63歳。1977年から1983年までの間、香港で騎手として通算24勝を挙げました。騎手引退後は、先のチャンピオントレーナーであるアイヴァン・アラン厩舎の調教助手として経験を積み、2000年の安田記念を制したフェアリーキングブローンなどの有力馬に携わりました。

2003/04年シーズンから調教師としてのキャリアをスタートし、初年度から34勝を記録すると、翌シーズンには47勝を上げるとともに、シンティレーションで香港クラシックマイルを制するなど、早くから活躍を見せます。近年は常にリーディングのトップ10圏内を維持し、2020/21年シーズンはキャリアハイの57勝で5位、2021/22年は45勝で7位、2022/23年は50勝で7位。現2023/24年シーズンは、3月13日終了時点で286戦34勝で5位(タイ)、通算勝利数は800を超えています。

本馬に加えて、これまでの主な管理馬にシンティレーション(2006・07年センテナリースプリントカップ)、サムズアップ(2009年香港クラシックマイル)、シーズンズブルーム(2018年スチュワーズカップ)などがいます。さらにここ3シーズンはロマンチックウォリアーで香港競馬界を席卷し、2022年に香港クラシックマイル、香港ダービー、クイーンエリザベスII世カップ、香港カップ、2023年にクイーンエリザベスII世カップ、香港カップ、今年に入り香港ゴールドカップを制しました。

海外でも同馬が昨年オーストラリアで行われたコックスプレートを勝ったほか、2012年にはリトルブリッジがイギリスのキングズスタンドステークスを優勝しています。日本に管理馬を送るのはそのリトルブリッジで参戦した2012年のスプリンターズステークス(10着)以来のこととなります。

● 騎手：カーチュン・リオン (Ka Chun Leung / 漢字表記：梁家俊)

1988年7月30日生まれ。双子の兄弟であるカワイは香港で見習騎手となり、現在はマカオで騎乗しています。カーチュン自身は香港ジョッキークラブの騎手学校を卒業後、ニュージーランドに渡ってランス・オサリバン調教師のもとで研鑽を積みます。その後、ポール・オサリバン厩舎所属の見習騎手として2008/09年シーズンから香港で騎乗を開始。2010年には国際見習騎手招待シリーズのアジアヤングガンズチャレンジで優勝するなど、順調なキャリアを歩みました。

2016/17、2017/18年シーズンには地元出身の最多勝騎手に贈られるトニー・クルーズ賞を受賞するなど、ここ数年はリーディング上位の常連として活躍し、2021/22年シーズンは自己最高の48勝でリーディング7位、続く2022/23年は36勝で8位、この2023/24年シーズンは、3月13日現在、328戦14勝で14位。香港での通算勝利数は450に迫っています。

ここまでの主な勝鞍に、2009年プレミアボウル(インスピレーション)、2016年ジャニュアリーカップ(フレイムヒーロー)、2017年シャティントロフィー、セレブレイションカップ(ともにビューティージェネレーション)、2019年香港クラシックカップ(ミッションタイクーン)、2020年プレミアボウル(ウィッシュフルシンカー)、2021年ジョッキークラブカップ(リライアブルチーム)、2023年レディースパース(エンカウンタード)があります。今年に入り本馬でセンテナリースプリントカップを制し、2017年にビューティージェネレーションで勝った香港マイル以来となるG1・2勝目をあげました。

日本での騎乗は今回が初めてとなりますが、武者修行先のニュージーランドをはじめ、オーストラリア、マカオ、

シンガポール、アラブ首長国連邦、フランス、英国で騎乗歴があります。